



どんなに医学が進歩しても、医療だけでは救われない人がたくさんいます。地域では、医療と福祉、保健との連携が大切な局面が多く見られます。

Aさんは五十歳代で、末期がんでした。そろそろ肉体的には限界だったのですが、奥さんのことが心配で死ぬに死ねない、という状態でした。

保険証持たず

Aさんはこれまでいろいろあって、奥さんの生まれ故郷であるこの町に流れてきました。奥さんは少し前に町に戻っていて、病弱の兄と住んでいましたが、脳出血を起こして半身まひになり、言葉も話せない状態でした。

福祉、保健との連携が大切

実は、Aさんは保険料を支払っていません。病院へ行くと金額自己負担となってしまうので、Aさんは保険料を支払っていません。病院へ行くと金額自己負担となってしまうので、Aさんは保険料を支払っていません。病院へ行くと金額自己負担となってしまうので、Aさんは保険料を支払っていません。

診断は腸閉塞(へいそく)で、最終的にAさんは奥さんと二人でアパート暮らしをすることにしました。Aさんが奥さんの面倒を見るようにしていたのですが、どんどん衰弱し、やがて食事でもできなくなり入院することになりました。

診断は腸閉塞(へいそく)で、最終的にAさんは奥さんと二人でアパート暮らしをすることにしました。Aさんが奥さんの面倒を見るようにしていたのですが、どんどん衰弱し、やがて食事でもできなくなり入院することになりました。

したが、その原因は大腸がんによるもので、すでに肝転移が認められていました。すぐに外科のある病院へ行って手術をしました。Aさんはそんな奥さんが自分の死後、どうなるかを思っていました。

私たちは奥さんがAさんの死後も、一人で生活していくことができないか検討しました。福祉サービスに相談して奥さんが暮らしていける方法を考えたのです。

奥さんの兄とは折り合いが悪く、最終的にAさんは奥さんと二人でアパート暮らしをすることにしました。Aさんが奥さんの面倒を見るようにしていたのですが、どんどん衰弱し、やがて食事でもできなくなり入院することになりました。

ようやくうまく行く組み立てができ、Aさんに「もう大丈夫、奥さんは一人で立派に生活して行けますよ」と伝え、Aさんはとても穏やかな顔をして聞いていました。

妻の行く末案じ

入院後も日に日に弱っていくAさんでしたが、泣き言は全くありませんでした。Aさんは死ぬことにはためらいがなかったようでした。

そして、その二日後の朝、眠るように息を引き取ったのです。Aさんの希望通り、奥さんは今も一人暮らしを続けられています。

(次回予定は奈良県)

葛西 智徳 9期生、1986年卒



町立田子病院。来年から診療所となることが決定している

田子町立田子病院

【私の勤務地】田子町は青森、秋田、岩手県境にある人口7000人の静かな山間の町。ニンニクや牛肉の町として全国に名をはせる。特に、ニンニクはテレビ番組「どっちの料理ショー」でもたびたび取り上げられるブランド。田子病院は病床60床、常勤医師4人の小さな病院である。